

● 「ノコギリヤネ100年マップ」とは

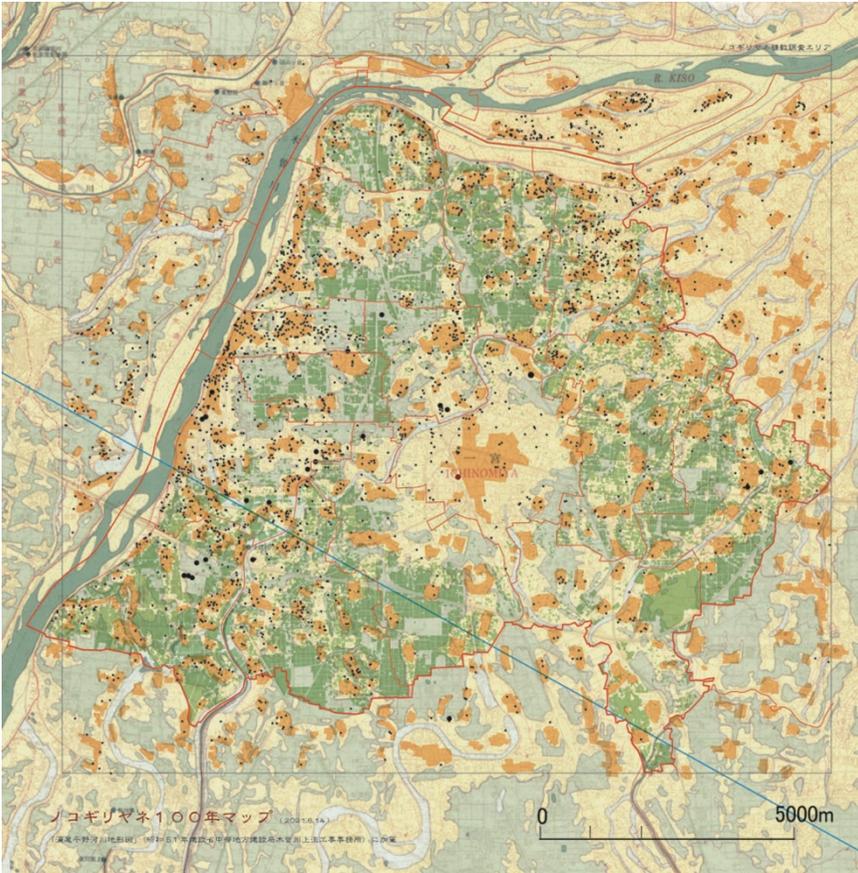
現在、ノコギリヤネは市内にいくつあると思いますか。ウェブ上の衛星画像から調べてみました。工場、倉庫等全て含めて、2,059棟（2020年11月末現在）検出できました。見落とし、間違いなどはあるでしょうが、概ね2,000棟という数字には、驚きとともに可能性を感じました。まさに、この尾張西部地域は「ノコギリヤネのある風景」なのです。

尾張の大地（濃尾平野河川地形図）を最下層に置き、100年前の地図から集落地を抽出し、地形図に重ねてみると、地域一帯を乱流していた木曾川が形成した自然堤防上に集落地が形成されたことが見えてきます。そして、時代とともに集落地は自然堤防上に拡大していき、1970年ごろには市街地と自然堤防のエリアがほぼ重なってきます。その後、さらに市街化が進行し、低地部の農地に侵食していったことが窺われます。

それでは、そこに現在をどう重ねればよいか。市街化（開発）していないところに注目してみます。これまでのように市街地は拡大していくのではなく、空洞化が進んでいきます。これは、「地と図」の反転です。これから都市の中のオープンスペース（空地）が重要な意味を持つはずですが、その中で、大きなウェイトを占めるのが農地です。これは、この地域の農業の行く末とも関わってくるでしょう。それで、現況地図から農地を抽出して重ねてみました。それが、「ノコギリヤネ100年マップ」です。

しかし、これまでの市街化の中で、農地は細分化され分断されてきました。地図上から、実態に即した農地の抽出を行いました。市街地の中の小さな農地を拾っていくと、その傍らにノコギリヤネを見つけることが多々あります。小さなノコギリヤネは、副業のコウバ（工場）として、農業をベースとした既存の地域共同体と一体であったことを実感します。

さて、「ノコギリヤネ100年マップ」から、どのような未来が見えてくるでしょうか。これからの100年に向けて。



「ノコギリヤネ100年マップ」

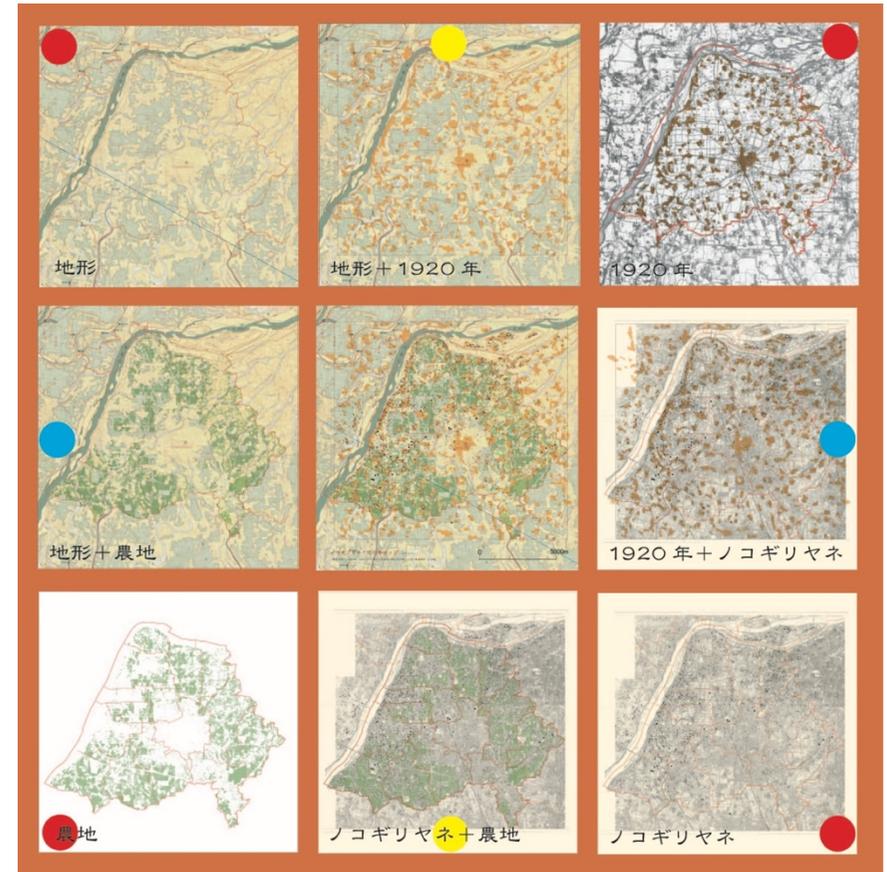
● 「ノコギリヤネ100年マップ」から思考／試行する

① カラーからモノクロへ、ポジからネガへ



- ・ 黒っぽい順に、A 市街地拡大のエリア（自然堤防上）、B 農地への侵食、C 旧市街地・集落、D 農地と河川
- ・ 市街地に埋没していたノコギリヤネがくっきりと浮かび上がった（ように見える）
- ・ 新たな「コウバ」への期待（工場から公場へ）

② 重ね合わせから分解へ



- ・ 4つのレイヤー（地形、100年前の集落地、現在の農地、ノコギリヤネ）に分解
- ・ その逆転の作業で見えてくるのは、農業と機業による共同体形成のプロセス
- ・ ノコギリヤネは、新たな「共同体」を形成するだろうか